

子どもの安全について

国立スポーツ科学センター

大伴 茉奈

私は第一期子ども安全管理士です。2015年の3月に全ての講座や課題が終了し、認定のメールを吉川優子さんから頂きました。4日間で8つの講座を受講し、様々な視点から子どもの安全について初めて主体的に学んだ場でした。知らなかった事実や知らなかった考え方に触れることができ、自身の知識の乏しさと視野の狭さを痛感しました。この講座を受講した理由の一つに、私自身の経験がありました。私はこれまでに行った高校ラグビーの調査研究の過程で、1件の試合中の頭部外傷による死亡事故に遭遇しました。この時の現場の状況や情景は今でも鮮明に覚えています。こんなに簡単に子どもの命が失われてしまうのか、と悲しさや悔しさ、自身の無力さにやるせなくなりました。そして、何か自分にできることはなかったのだろうか、子どもの事故を予防できる人にならなくてはと強く感じました。そのためにはまず、自分自身が子どものことを知らなくてはならない、何か学べる場はないのだろうかと思い、「子ども 安全」と検索したところ、吉川優子さんにたどり着きました。そして、講座を通して子どもを中心に世の中を良くしようと考えている沢山の大人にも出会いました。講師の方が「変えられるものを見つけて、変えられるものを変える」ことが大事だと仰っていました。吉川さんも、「目の前のことではなく、その先の社会や組織の問題に矛先を向けてしまうことがあります。確かにそこにも問題はあるかもしれないのですが、だからといって“仕方ない”と諦めてしまうのではなく、変えられるものを見極める力を持つことがとても重要です。」とお話されていました。一人ひとり、できることは違います。自分には何ができるか、何ができるようにになりたいのか、これを見極めるためにまだまだ自分自身も学び続けなければなりませんね。

先日のニュースで子ども3人が「お手柄」と取り上げられていました。坂道を下る無人の乗用車に気が付き、周囲に助けを求めて事故を防いだとして、小学1年生3人が表彰されていました。サイドブレーキが甘かった車を3人で協力して止めたというニュースでした。3人はそれぞれ役割分担を決めて、周囲に安全を呼びかけたり大人を呼びに行ったりしてピンチを救ったようです。「勇気を出して良かった」と誇らしげな表情で写真に写っていました。その中の1人が、「本当に怖かったけど、何かしなければと思った。誰もけがをしなくて、うれしい。」と答えていました。我々大人が思っている以上に子どもたちは沢山感じて、考えて、行動もしているのです。

本誌「子ども安全研究」は様々な方のご協力によって第8号が発刊されました。編集に関わらせて頂き、多くの素敵な大人に出会いましたが、今後は子どもたちの目線にもっともっと寄り添って、子どもたちの命や安全について考え学ぶことができる活動と社会づくりを目指していきたいです。